

部位別
がん研究室

FILE
06

婦人科がん②

子宮頸がんの診断

婦人科がんシリーズの第2回は子宮頸がんの診断について詳しく説明します。
(がん研究会有明病院の先生方にリレー形式でご執筆いただいています)



くりた ともこ
栗田 智子

がん研究会有明病院
婦人科副院長

1996年産業医科大学を卒業。産業医科大学病院、九州労災病院などで研修。婦人科腫瘍専門医・がん治療認定医・婦人科内視鏡技術認定医などを取得し、2019年からがん研究会有明病院婦人科で勤務。婦人科腫瘍の診療と手術に従事している。

1 早期は自覚症状がないことが多い

前がん状態や浸潤を始めたばかりのころには、自覚症状がないことが多く、性交渉に伴う接触出血や月経以外の不正出血、異常帯下がみられる程度ですが、子宮頸がんが進行すると、下腹部痛・水腎症による腰痛や、膀胱・直腸への浸潤による血尿・血便が見られることがあります。

2 組織型分類だと扁平上皮がんが7割

子宮頸がんの組織型は、扁平上皮がんと腺がんが大きく分けられます。扁平上皮がんが全体の7割程度、腺がんが2割程度を占めます。扁平上皮がんも腺がんも、がんになる前の状態が存在し、その中でも前がん病変と呼ばれる高度

3 検査でがんを早期に見つけることができる

異形成では治療が必要になります。

子宮がん検診

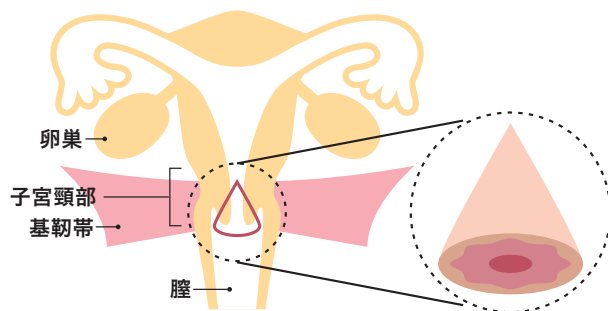
子宮頸がんは、異形成(子宮頸部上皮内病変)という前がん状態を経て、がん化することが知られており、がんに進行する前に子宮がん検診で見つけることができます。問診(ワクチン接種の有無など)、陰鏡診(子宮頸部の観察)、内診(子宮や卵巣の触診)、細胞診(子宮頸部からブラシなどで細胞を採取し、異常な細胞が出現していないかを顕微鏡で調べる検査)のほか、近年ではHPV検査(ヒトパピローマウイルス検査)・子宮頸がんの主な原因ウイルスで子宮頸部の細胞から行われるウイルス検査)も取り入れられています。

【細胞診】子宮の入口(外子宮口)付近を器具でこすって細胞を採取し、細胞の形の異常などについて確認します。細胞診で得られた結果はすべて「疑い診断」であり、細胞診のみで診断が確定することはありません。細胞診でLSIL(軽度扁平上皮内病変)やHSIL(高度扁平上皮内病変)が疑われたり、ハイリスク型HPV(代表的なもの:HPV16、HPV18)が陽性であった際は、精密検査を行います。

精密検査

子宮頸部細胞診で異常が疑われたときには、精密検査としてコルポスコピー診(陰拡大鏡による診察)および組織診を行います。コルポスコピー下の組織診で診断困難である早期子宮頸がんの場合、円錐切除術という手術検査(図1)によって進行期・病変の広がりを確認し

図1 円錐切除術



ます。また、がんの広がりを確認する検査としては、内診・直腸診の他、超音波検査、CT・PET-CT検査やMRI検査、膀胱鏡や直腸鏡なども行います。

【コルポスコピー診】コルポスコピーという拡大鏡で、子宮頸部の粘膜表面を拡大し細かい部分を観察します。通常、コルポスコピーで異常が疑われた部位の組織を採取することにより、組織診の診断精度が上がると考えられています。

【組織診】細胞診で異常があった場合は、コルポスコピーで病変の疑わしい部分から小さな組織を切り取り、顕微鏡で診断します。子宮頸がんであることの確定診断に用いる検査です。

【円錐切除術】子宮頸部の一部を円錐状に切除します(図1)。画像の検査でわからないような早期がんの場合には、顕微鏡でがんの広がりや正確に調べる目的で円錐切除術を行い、がんの広がりに応じた適切な手術の方法を決めます。

【膀胱鏡/直腸鏡】膀胱内・直腸内にカメラを挿入し、治療前に転移や周辺臓器へのがんの広がりを調べます。通常、子宮頸部の病変はMRI検査のほうが明瞭に描出されます。そのためMRI検査は骨盤内病変の精査を目的として行われます。

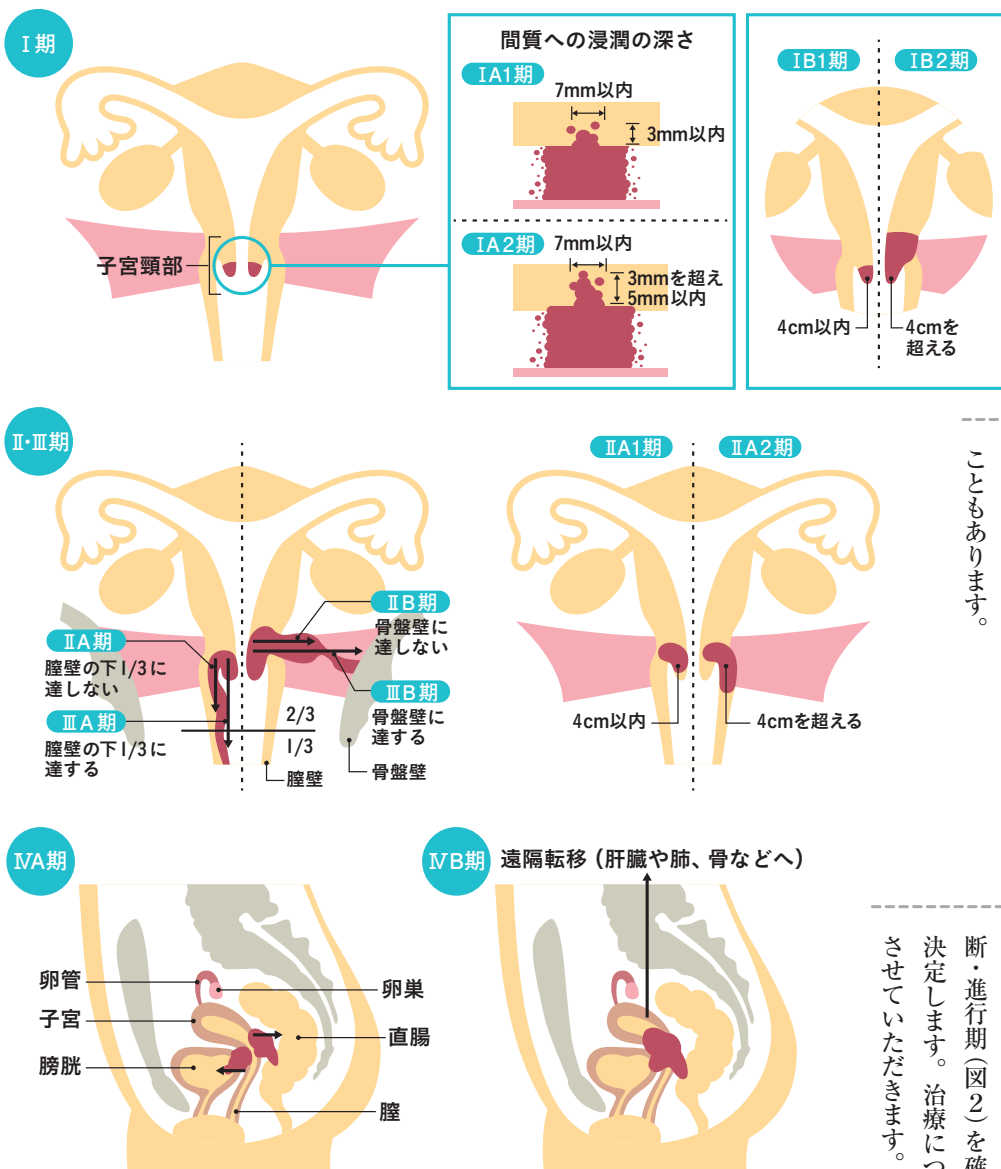
メラを挿入し、膀胱粘膜や直腸粘膜面へのがんの直接浸潤を評価します。

【腫瘍マーカー】腫瘍マーカーとは、がんの種類により特徴的に産生される物質で、血液検査などにより測定します。この検査だけでがんの有無を確定できるものではなく、がんがあっても腫瘍マーカーの値が上昇を示さないこともあり、逆にがんがなくても上昇を示すこともあります。

以上の検査によって子宮頸がんの診断・進行期(図2)を確認し、治療方針を決定します。治療については、次回説明させていただきます。

【内診/直腸診】内診では、腔に指を入れ、もう片方の手は下腹部にあて、両方の手で挟みながら子宮の位置や形、かたさなどを調べます。直腸診をすることもあり、子宮傍組織(基韧带・きじんたい)への浸潤の程度、直腸やその周囲に異常がないかを、肛門から指をさし入れて調べます。

図2 子宮頸がんの進行期分類



*図は日本婦人科腫瘍学会編「患者さんとご家族のための子宮頸がん・子宮体がん・卵巣がん治療ガイドライン第2版」(金原出版)を参考に作成